

BASARE

九重からここえへ

vol. 07



特集：九重林業のいまむかし

佐藤嘉久二さん、工藤洋一さん

●手前味噌の会

穴井ツヤ子さん、梅野紀久子さん、梅木リツ子さん

●この場所で、倦まず弛まず仕事する。

藤原ユリ子さん、清水智子さん

●ここえのココハドコ？

BASARE

九重からここえへ

発行日：2017年10月31日 発行人：九重町公民館 BASAREプロジェクト 本書への問い合わせ先：九重文化センター 大分県玖珠郡九重町
TEL：0973-76-3888 Mail：bunika@town.kokonoe.lg.jp Facebookページ：<https://www.facebook.com/basare.kokonoe/>
バックナンバーは九重町HPからご覧いただけます。本書は、無料で配布しております。
本書の一部または全部を無断で複写、複製することを禁じます。Printed in Japan © Kokonoe Town.

KOKONOE FreePaper 2017.10

「九重からここえへ、しあわせのおすそわけ」をテーマに、ふだん着姿のたくさんのいいもの・いい人を町の人人が発見し、まちの人へ伝えるフリーペーパーです。
*バサレとは、大分の方言で「たくさん」という意味です。



vol. 07

九重林業のいまむかし

語り 佐藤嘉久一さん、工藤洋一さん

山の仕事、林業。九重町は約8割を森林が占める山の町だ。もちろん主な産業の一つである。しかし、昭和50年代を境に木材の値段はどうぞんと下がっていた。一方、最近では木の持つぬくもりや温かさが注目され、改めて林業が見直されてきている。九重林業の「いま」と「むかし」、それを知る一人、佐藤嘉久一（以下、佐藤）さん81歳と、工藤洋一（以下、工藤）さん62歳。今回は、お二人のお話から、山仕事へのイメージを膨らませ、お二人が九重の山仕事を先に見たもの、感じたことを追体験する時間をご用意しました。それではどうぞ。

それぞれの「林業への道」

佐藤さんは昭和26年に中学を卒業し、昭和28年の大災害をきっかけで山仕事を始めた。理由は賃金がよかつたから。当時、土木作業は一日300円。ところが山仕事は一日500円だった。その頃の100円は今の感覚で4,000円ぐらいというから、この200円の差はかなり大きい。

林業一筋の佐藤さん、昭和61年には県の「

クールで優勝をしている。当時は作業のスピードと、狙った場所に木を倒す正確性を競っていたが、最近では安全性を重視するものになってしまった。「ハンマー優勝後は林業の指導者として県内全域、遠くは静岡まで指導者として巡り、近隣では田田林工、湯布院の林業研修所で指導していたそうです。

一方、工藤さんは現在、林業会社を経営、多くの若者を雇用している。もともとは父親が、国有林（国が所有する山）の仕事を請け負っていたのが林業との出会い。高校を卒業後、2年間の会社勤めを経て、昭和50年に20歳で本格的に林業の道へ。その頃は190haの山の下刈りや伐採を行っていたという。東京ドームの約40倍の広さだ。林業用の機械を導入し始めたのは平成3年の台風19号災害の後だそう。と言っても林業用の機械はかなり高い。しかし、大風で曲がり、しなった木の処理をチエーンソーとワイヤーで行っていた当時、命がいくつあっても足りないと想い、なんとか一機を購入した。

災害をきっかけに林業を始めた佐藤さん、災害をきっかけに大きな決断をした工藤さん

ん。ピンチの時の選択があつて現在に至りている一人の姿が、重なって映つた。

いまむかしの話し

佐藤 「昔はノギリとクサビ、ゲンノ（金剛）だけで大きな木を切り倒しよつた。昭和40年ころにチエーンソーが日本に入ってきた。その頃のチエーンソーは振動防止装置とかなかつたけん、今じゃワイヤーシャツの一番上のボタンが留められへくなつてしまつた」 そう言って、完全には曲がらない腕を嘉久一さんは見せてくれました。

工藤 「うちのところの仕事はほとんど大きい機械でしています。高いけど、安全性とか作業効率とか考えると、今はやっぱり機械

が必要になつてくる。それに（機械には）、切つたり・掴んだり・運んだりと、いろいろ種類があるので、それぞれの機能を十分に発揮するには、いくつもの機械の連携が必要になるんよ」

材の持つ力

佐藤 「だ、ヒノキはまっすぐに伸びちよるけど、雑木は幹でバラッスが違う。どちらに倒すんが一番いいか考える。日光のある斜面は特に伸びがいいけん、場所場所で同じ木はない。そういうのも全部含めて木の持つちよる力。その力をを利用して切らんと間違が起きる」



山を読む

山の仕事は危険とも隣り合わせ、事前の準備がかかる。山の地形や土の質、水の流れ、崩れやすい所がどうかなどの下見をして現場の地図を作るんです。下見でこれだけ多くの情報を正確に読み取れるかは経験がモノをいう。（情報が）足りなければ何度も山を見に行きます。でも仕事の進み具合や天気によって、山の状況はどんどん変わっていくんですね、だから事故も起きる。機械のおかげで小さな危険は防げるようになったら、一回事故が起つると重大事故にながってしまう。安全管理には『こうするといいですね』という想像力も大切です。

山の状況を読む力、危険を予知する力。体力勝負のイメージのある山仕事、それだけではない仕事の内容が垣間見れた。

光の入り具合で森が綺麗に見える時間は美しい

佐藤「仕事をした面積で給料がもらえるのがいいですね。山は空氣もいいし、環境のいいところでの仕事をしてお金をもらひさんは最高」

「思つたどおりに木を倒せたときには、山の神様ありがと一つ手を合わせ貰つたわ。大木の時ほども受け思つ」

工藤「能力に応じた賃金がもらえるとJJK。草だらけの山の下草刈りをしてきれいになると気持ちがいいし、そこに光の入り具合で森が綺麗に見える瞬間は美しいよ」

山仕事、そこでしか味わえない達成感と醍醐味がここにある。

その場しのぎの仕事をしない

工藤「木を倒す時に、周りの木に傷をつけたり、製品にしたときのクレームに繋がってしまう。そういう意味でも正確に木を伐り倒す技術がとても大切な。それに、木を切る時には株を低く、斜めに切つておくと後の手入れや植林がしやすくなる。植林しないと後の仕事に繋がらないからね」

いかに相手のことを思って仕事をし、島の長い信頼関係を保つには、それに足る仕事ができているか、日頃から心掛けることが必要だ。

山へ行くこと

佐藤「山に入るときには塙、米、お神酒を持つお行儀、木の根に供えね」

工藤「今でも従業員はお神酒と塙を持って山に入りますよ。常に危険と隣り合わせの仕事だからね、自分の戒めと『山の神様』への畏敬の念を重ね言わせてお供えをする人の心にまつわることは今も昔も変わらないのかもしれない」

変わつていく仕事のやり方、そして、変わらない山への思い。お二人の日常は、何十年とかけて育てられた木に、次の新たな役目を与える第一歩となる仕事、林业。受け継ぐのは次の世代の役目だ。

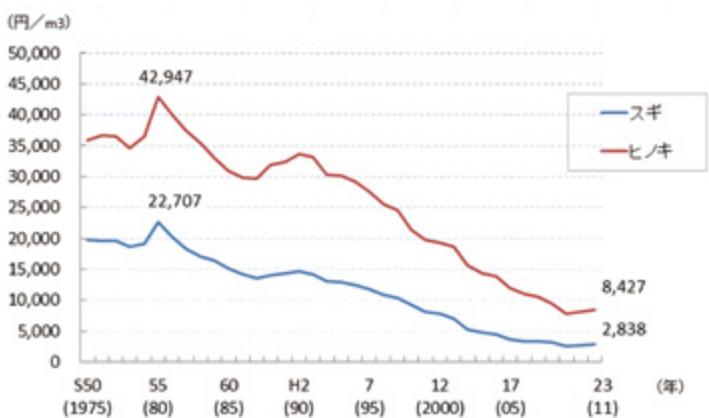


九重町の林业の歩み

日本は木の国との文化と言われるようになり、古来より木とともに生活し、その歴史は伐採と植林を繰り返してきた。

九重町では戦前にかけて九州水力電気（現九電）が「水力電気の基礎は水源を養うこと」にあり」として麻生觀八の提唱の下、大植林計画が実施され各地で植林が進められた。その後、戦中の乱伐により山林は荒廃したものの、戦後の昭和20年～30年代には戦後の復興等のため日本中で木材需要が急増し、伐採跡地への造林のみならず、里山の雑木林や奥山の急峻な天然林までが切り開かれ、代わりにスギやヒノキなど成長が早い針葉樹の人工林に置き換えられた。当時、建築用材となるスギやヒノキの経済価値は高く、需要増加に伴い価格は急騰し、一大造林ブームの様相を示した。これは九重町でも同様で、九重町の合併時より多くの植林がされ、原野は山林へと変わり、現在周囲に広がる山林の姿へと変貌していく。

しかししながら、急騰していた木材価格は徐々に下がり、一部では粗放經營や間伐されずに放置される山林が増加していることも指摘されている。



一般財団法人日本不動産研究所 山林素地及び山立木価格表より



手前味噌の会

今年もうちげん味噌が
できました

穴井ツヤ子さんの手前味噌

「味噌ん色がくりりけん恥ずかし
ですよ」

大正時代から同じ分量で作り続
けてきた穴井家の味噌は、3年もの。
裸電球が灯る味噌部屋には、味
噌樽のほかに、手作りの果実酒が棚
に並びます。

冬はお湯割り、夏は冷やで。

「夕飯の時にお父さんと飲むの」そう
話すツヤ子さんの隣で、微笑みなが
ら頷いているのはご主人の雄一郎さん。

昔はお姑さんと作っていた味噌、今
は雄一郎さんとふたりで作ります。

味噌樽に記された文字、(平成26
年11月23日 主人2人で 午後2時
終る)へ

ツヤ子さんは、味噌を作った日、出
した日を細かく記録します。そう
して出来た味噌は、「ふたりで食べ
るには多すぎるけんね」と、離れ
て暮らす子ども達へおすすわけ。

ふたり暮らしななつた今、お互いの
健康を気遣い、相手を頼り協力し
合う、そして感謝する生活。
食事も、運動も、楽しみも、自分
たちの中にある「これはいいかも」
の感覚をしっかりと持つて続けていく。

優しさと笑顔と手作りの食材が、
家中に溢れているそんな穴井家の食
卓に、今年もお湯割りの季節がやっ
てきます。



配る先は、「地元もんから、玖珠ん
しまで、だいたい40人くらい」
待つてくれている人の為に、紀久
子さんは毎年たくさんの味噌を作
り続けます。

手作り味噌は、その人、その家の
常在菌の力によって仕上がりでいきます。
冬に仕込み、たまに「どげじゃろ
か」と、覗いてまた蓋をする。梅
雨明けまでじっくり発酵させたら美
味しい味噌の出来上がり。

毎日口にするものだから、防腐剤
など余計なものは一切入っていません。

手作り味噌のかおり、
それは幸せのかおりで、
手作りの食材が並ぶ食卓は、
実はすごく贅沢なことで、
そのことは全て、紀久子さんの笑顔
に表れていました。

「よそで味噌汁を食べた時に、違う
な「おいしくなれ」よね、やっぱ手作りが
美味しいわ」

梅木リツ子さんの手前味噌

「おいしくなれ♪」
12月の第2土曜日、梅木家では「

離れて暮らす子ども家族が集まり、
家族総出の大行事、味噌作りが始
まります。

大豆は前日、地獄蒸しに入れ味
噌作り当日に息子さんが引き上げ
ます。

それそれに役割を決め、みんなで
協力しあつての作業は慣れたもの。
以前は年末の餅つきと一緒に行つて
いた味噌作り。

ある年、雪で帰れない家族が出たこ
とをきっかけに、家族みんなが楽し
みにしているこの行事を、12月の前
半に変更。それだけ大事なこの味噌
づくりには、いくつかのお手製が行
事を盛り上げます。

麹、大豆、塩に昆布だし、削り
鰯を合わせ登場するのが、お手製の
棒。そしてもう一つのお手製、「おい
しくなれ♪」の歌。

みんなで、「おいしくなれ♪」
「おいしくなれ♪」と歌いながら
お手製の棒でかき混ぜて、あとは、
梅雨明けの出来上がりを楽しみに
待ちます。

この日の夕飯は、昨年の味噌で作
る豚汁となり寿司。

梅木家にとっての味噌作りは、家
族が集まる大切な一日だったのですね。





「恵良の店で職人をしていた頃、この場所を紹介されたんです。その頃、娘も生まれたので、それをきっかけに主人とふたりで始めた」そう話してくれるユリ子さんの横にご主人の姿はない。

娘さんが中学2年生の時、ご主人は他界。

それから40年以上、ユリ子さんは子育てをしながらひとりでこの店を続けてきた。

理容ナポリ
藤原 ユリ子さん（東飯田）

GREEN WATER
Tonique Capillaire

東飯田地区松木川に架かる松木大橋の目の前に、理容室のサインポールが回る。

店の名はナポリ。

店に入ると清潔感ある制服に身を包んだ店主の藤原ユリ子さんが出迎えてくれた。

何もなかつたこの場所に、理容椅子を2台買つたあの日から57年。

この場所で、

倦まず弛まず仕事する。

高塚商店

清水智子さん（飯田）

大吊橋を過ぎて笠の口の入口付近、県道40号線沿いに昔ながらの商店がある。

小字名からとったその名は高塚商店。食料品を取り扱っている創業50年になる店だ。

店に入ると手書きで書かれた商品名や値札が目につき、それがなんとも味わい深い。

そんな中、高塚商店が長く続けてこれたのも、この場所を必要とする人がいて、その人たちの為に誠意を持つて頑張る店主がいるから。

「お客さんから、あんたんとこがなくなると困ると言われるのでも、その人達のために頑張りたいです」しゃべりする光景がみられるだろう。

「昔はね、おがくず釜に七輪で火をおこしてお湯を沸かして、それをシャワーポンチの時に使つてたのよ」と、道具を手に取り、当時の苦労が伝わる話をしてくれた。ある時ユリ子さんは、右腕を複雑骨折。長期間にわたり店を閉めなければいけない状況となつた。「手術後、仕事復帰をする為に、一生懸命リハビリに通つたわ。だつて、生活があつて食べていかなきやいけないからね」

ユリ子さんの努力もあり、1年半後に店を再開。

しかし、骨折した腕はハサミやカミソリを持つ手。「とにかく怖くて怖くて、最初はちゃんと手が動くか不安でね。そうしたら、常連さんが俺の顔で試しにやってみたらと、自ら申し出てくれて、おかげで自信を取り戻し、今も続けられているんです」店と供に歩んだ57年。

椅子が1台になつた今でも、来てくれるお客様がいる限り、理容ナポリのサインポールはいつものように回り続ける。

「私がね、小さい字が見えにくくなつたから手書きしているんですよ。それにうちほど高齢のお客さんが多いので字が大きいほうがいいんです」店主の清水智子さんが優しく丁寧にその理由を説明してくれた。

元々はホテルに野菜を卸していたのが本業で、その後倉庫を店にしたのが今の高塚商店の始まり。それから、時間に流されながら必死にやってきました。

「最近の若い人や、車を運転する人は、ディスカウントストアに行くでしょ。けれど一人暮らしの高齢の方はそれができないんです。そんな人達のためには頑張っています。商品もお年寄りの方が使うものを置いてますし、みなさん買い物ついでにおしゃべりもしていくんですね、その時間が私も楽しいですね」

人が集まり顔を見て話ができる場所。特別なことはいらない、ただなんとなく、今伝えたことを言葉にする。「寒いね」「最近どうづくね」それがよくて、それだけでいいそんな場所。

昔は、段々畑が広がり、道の向こうには酒屋、豆腐屋、やきとり屋などが明かりを灯し賑やかだつたらしい。少しづつ変化する外の景色。

そんな中、高塚商店が長く続けてこれたのも、この場所を必要とする人がいて、その人たちの為に誠意を持つて頑張る店主がいるから。

「お客さんから、あんたんとこがなくなると困ると言われるのでも、その人達のために頑張りたいです」

これからも、高塚商店で智子さんとお客さんがおしゃべりする光景がみられるだろう。

ここえの
ココハドコ？

CLICK
IT!

こんな所あったんだ！ここはどこの景色だろう？
つい写真を撮りたくなるような、そんなスポットをご紹介。
あなたの身近にも隠れているかもしれません…♪
さあ、ここえのココハドコ？

#Handa



#吉部 #リンゴ #チェリー #青空
#ここえのココハドコ？

心温まる屋根付きポストが
今日もみんなの手紙を守ります。



#中村 #grow #ハート #下駄
#ときめき #職人 #ここえのココハドコ？



#湯坪下 #屋根付き #シブい
#ここえのココハドコ？

かわいいハートマークの向こうに
職人のやさしさが見えてきそう…！

#Nogami



#水分 #蒸気車 #勢いある
#ここえのココハドコ？

野上石橋群のひとつ。
明治時代にタイムス
リップできそうな古風
な出で立ち！



#尾本 #深瀬橋 #九重町指定有形文化財
#歴史 #明治 #ここえのココハドコ？

水ではなく温泉の蒸気で回ってる。
日本でココだけなのでは？！笑

#Minamiyamada



#陣ノ内 #アート #壁 #芸術
#オーストラリア #ここえのココハドコ？



#井手 #パワースポット #惚れ地蔵
#削られている #ここえのココハドコ？

オーストラリア人の国際交流員が帰国前に
描いてくれたお宝壁画♪

#Higashihanda



#室園 #稻荷 #鳥居 #きれい
#ここえのココハドコ？



#奥野 #木の精 #楽しさを忘れない
#かわいい #ここえのココハドコ？

いつも室園を見守ってくれているお稲荷さん。
今日は何をお願いしようかな♪